

鎌倉楽しむ会の出張講話

「わらび学びあいカレッジ」

「いざ・参る 義経と弁慶の世界へ」

義経の誕生

平治元年（1155）牛若丸生まれる。源義朝と九条院の雑仕・常盤御前との間に義朝の九男、今若、之若につづく常磐の三男として誕生。

この年の十二月、父・義朝と平清盛との間に勢力争いが始まる。結果、義朝は清盛に敗れ部下に謀殺される。清盛は、捕虜となった十三才の源頼朝と常盤御前の男子三人を殺すことにした。頼朝は池禅尼の嘆願によって伊豆に配流されることとなった。

一方、常盤御前は三人の子を連れ平清盛に身を以って助命の嘆願。京の都で絶世の美女だったので、清盛に囲われ、之若は園城寺へ、之若は醍醐寺に預け、乳飲み子の牛若は母・常盤御前と清盛のもとで六年間囲われの身となる。牛若は清盛を実の父親と思つて暮らす。この囲われの母・常磐と清盛の間に女子が生まれ、これが清盛の正室・時子

に知られる。

そして、常磐は大蔵卿・藤原長成に嫁ぐ。七歳の牛若は鞍馬山の寺に預けられ「遮那王」と名乗る。

鞍馬山の遮那王

預けられた遮那王は、ここで父は清盛のライバル義朝であることを知り愕然とする。そして、天狗を相手に剣術の修行に励む。読経よりも中国兵法を読み武芸を磨く。遮那王十一才の時、都に僧兵の刀狩を聞く。

武蔵坊弁慶の誕生

熊野別当「湛増」の子として生まれる。母の胎内に十八か月いて、生まれた時は2、3歳児の体つきで、髪は肩まで伸び、奥歯も生えていたといわれる。

幼名は「鬼若」と命名され京で育つ。比叡山で修行するが、乱暴で追い出される。そこで剃髪し「武蔵坊弁慶」と名乗る。

牛若（遮那王）と弁慶の出会い

弁慶は京で千本の太刀を奪つ悲願を立て九

九本まで集める。あと一本というところで、五条大橋で牛若と出会い、牛若の見事な太刀を奪おうと襲いかかるが、牛若に負け、以来終生、牛若の家来となる。

遮那王から「源九郎義経」へ

金売り吉次信高の案内で、奥州藤原秀衡の元へ鞍馬を抜け出す。承安四年（1174）一六才の時のことである。途中「鏡の宿」で元服し「源九郎義経」となる。

義経と兄・頼朝の再会

後白河法皇の皇子・以仁王が平氏討伐の令旨を各地に送る。兄・頼朝の拳兵を知り、治承四年（1180）奥州藤原秀衡の反対を押し切つて、弁慶以下三〇〇騎余りを引き連れて、頼朝のもとに馳せ参ずる。

黄瀬川（現在の静岡・治津）で再会の喜びに涙の対面をし、平氏を討つことを誓う。

義仲を討ち郷御前を正室に迎える

先陣を切った「木曾義仲」は平氏を京の都から追い出したが田舎者育ちで、都を荒し

不興をかった。後白河法皇は、目に余る義仲軍の追討を頼朝に要請。

義経は、頼朝の弟・範頼と義仲討伐のため鎌倉を出発。時に義経二五才。義仲敗れ近江の国・栗津で討たれ三十一才の生涯を閉じる。

義経は京の堀川邸で、兄・頼朝の命により、御家人の河越重頼の娘・郷御前を正妻に迎える。

義経、静御前を見初める

平氏討伐の命が下され元暦元年（1184）一の谷の勝利。その勝利の宴の席で静御前の舞を見初め愛妾とする。

文治元年（1185）には屋島、そして壇ノ浦で平家を滅亡させる。壇ノ浦の戦いでは、八才の安德天皇は、清盛の妻・二位尼と共に入水。宝剣も沈む。

建礼門院は助けられ、平家の総大将・宗盛と嫡男・清宗は捕虜となる。

義経の凱旋と頼朝の不興

平家を滅ばした義経は京の都に凱旋。後白河法皇より官位を受ける。また、昇殿も許

される。

さらに、平時忠の娘・藤姫を側室として迎える。これ等が頼朝の激怒することとなる。（義経二十七才）

義経の鎌倉入りの拒否

義経は、宗盛父子を捕虜とし、意気揚々と鎌倉に向かう。しかし、頼朝は勝手に官位をもらった者は、鎌倉に入ってはならないと命令を出す。

そのため義経は鎌倉に入れず、腰越の萬福寺に留まる。宗盛父子は頼朝の命で、政子の父・北条時政に引き渡される。

義経の「腰越状」

義経は萬福寺に逗留し無実を訴えた書状を并慶に下書きさせ、自ら政所別当・大江広元に宛てて嘆願する。しかし、許してもらえず宗盛父子を引き連れ京都に引き返すことになる。この義経が嘆願した書状は、世にこれを「腰越状」という。

平家の終焉

京都に引き返す途中、義経の元服した鏡の宿場を通り過ぎた篠原の地で、捕虜の平宗盛父子の首を刎ねる。ここが平家の終焉の地となる。（現・滋賀県野州町）

頼朝 刺客を放つ！

京の堀川邸の義経が刺客に襲われる。静御前の機転により、難を免れて、逆に刺客首謀者を捕らえ、首を刎ね六条河原に晒す。刺客を放った張本人は、兄・頼朝であった。刺客の手先となったのは、頼朝の御家人・土佐坊昌俊であった。（この土佐坊昌俊は、現在の東京渋谷・金王神社の御先祖です）

そこで、義経は、後白河法皇より頼朝追討の宣旨をいただき豪族の応援を求めるが、その数は少なく、逆に頼朝の御家人が大挙京に迫ると、今度は、後白河法皇は頼朝に義経追討の宣旨を出す。（義経二十八才）

義経 京を脱出

義経は頼朝に追われる身となり、京に留まることに身の危険を感じた義経は、静御前と別れ、并慶など手勢を連れ九州に逃げる

ため大物浦から舟を出す。

しかし、天にわかには掻き曇り壇ノ浦に沈んだ平家の怨霊のためか暴風雨となる。弁慶の必死の祈祷により、住吉浦に漂着する。

義経、弁慶主従山伏の姿となる

その後、義経一行は山伏の姿に身をやつし京の周りを逃げ回り、静御前と再会す。

義経、静御前と別れる

追手を逃れ、義経は静御前や弁慶を伴い、雪降る吉野へ向かう。しかし、吉野山は女人禁制のため、再会を約し静御前は山を下って行った。山を下る途中、頼朝の家中に捕らえられ鎌倉へ連れて行かれる。この時、静御前は義経の子を宿していた。(静御前十八才)

静御前の行く末

吉野での別離から半年後、頼朝の命により、鶴岡八幡宮で舞う静御前。武骨な鎌倉武士は静の舞に酔いしれる。義経を慕う静の舞に頼朝は怒るが、政子に諫められる。

そして、義経との間に生まれてきた子は男の子。頼朝はすぐさま由比ヶ浜に捨てよう命ずる。傷心の静御前は京に帰って行ったが、二十代前半で亡くなったとされています。

義経、藤原秀衡のもとへ

山伏姿に扮した義経主従は、藤原秀衡を頼り奥州平泉に向かう。途中、安宅関で関守・富樫泰家に見とがめられ、弁慶は東大寺勸進の白紙の勸進帳を読み上げ、義経を庇う。

関守・富樫は弁慶に忠義の心を感じ、関を通す。秀衡のもとで、高館の地に屋敷を構える。

しかし、義経一行の平泉到着八ヶ月後に、秀衡死去。

義経の最後

秀衡の後を継いだ四代・藤原泰衡は、頼朝に味方して、高館の義経邸を急襲した。急襲を受けた義経は奮戦虚しく館に火を放ち、妻子と共に持仏堂で自害した。

弁慶はこの戦いで喉笛を打ち裂かれて全身赤く染めながら戦い、何本もの矢が体に刺さったまま館の前に立ちはだかつて死に、義経を守ったと言われている。

義経、神として祀られる

義経の首と弁慶の首は、鎌倉に届けられ、腰越・萬福寺において侍所別当和田義盛と梶原景時によって首実検されたが、頼朝は「間違いない」の報告を受けると片瀬の浜に捨てさせたという。(義経三十一才)。

しかし、金色の亀が泥まみれの首を背負って上がってきた。そして見慣れない童子が現れ「我れは義経なり願わくば、我が首を葬ってほしい」と言い終わると金色の亀とともに忽然と消えた。

村人が驚き、その首を丁寧に洗い清め藤沢の里に葬ったという。

現在は藤沢・白旗神社の御祭神として祀られている。

(文責 清藤 孝)

以上